

研究主題「各教科等で身に付けた資質・能力を活用して、
『自己の課題』を解決させる学級活動(2)の工夫
—教科等横断的な視点で指導計画を組み立て、
身に付けたことを整理して可視化させる指導を通して—

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課
調布市立北ノ台小学校 主幹教諭 関 聡司

第1 研究のねらい

小学校学習指導要領解説特別活動編(平成29年7月)では、特別活動における「見方・考え方」は、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」として示され、「『集団や社会の形成者としての見方・考え方』を働かせるということは、各教科等の見方・考え方を総合的に働かせながら、自己及び集団や社会の問題を捉え、よりよい人間関係の形成、よりよい集団生活の構築や社会への参画及び自己の実現に向けた実践に結び付けることである。」と示されている。また、各教科等で育成した資質・能力は、特別活動での実践的、体験的な活動を通して、社会生活に生きて働く汎用的な力として育成されることが明確に示された。これらのことから、特別活動は、「学校と社会とをつなぐ架け橋」の役割を果たすものであると考えた。

以上のことから、本研究では、上記の研究主題を設定した。そこで、学級活動(2)を中心に教科等横断的な視点で組み立てた指導計画や、各教科等で身に付けたことを整理して可視化した教材「つながりノート」の開発を行う。このことにより、各教科等で身に付けた資質・能力を活用して、「自己の課題」を解決しようとする児童を育成することを研究のねらいとする。

第2 研究仮説

学級活動(2)の指導において、教科等横断的な視点で指導計画を組み立て、身に付けたことを整理して可視化させる指導をすれば、児童は、各教科等で身に付けた資質・能力を活用して、自己の課題を解決しようとするだろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

- (1) 学級活動(2)の各題材を中心に、教科等横断的な視点で指導計画を組み立てるために、各題材における課題解決場面で活用させたい各教科等で身に付けるべき資質・能力を整理した。
- (2) 学級活動(2)の学習過程において活用させたい各教科等で身に付けた資質・能力は、道徳科との関連が深く、特に「5 希望と勇気、努力と強い意志」は、意思決定したことを粘り強く実践する場面で必要となる。ここから、「5 希望と勇気、努力と強い意志」での学びを自己評価欄に位置付け、実践期間中に振り返ることができるようにする。

2 調査研究

(1) 調査の概要(令和元年7月に教員・児童を対象とした質問紙調査をそれぞれ実施)

都内公立小学校3校、学級担任の経験がある56人の教員を対象に、各教科等で身に付けた資質・能力を活用して自己の課題を解決させる指導に関する意識調査を行った。また、都内公立小学校3校、第5学年及び第6学年653人の児童を対象に、各教科等で身に付けた資質・能力を活用して自己の課題を解決することに関する意識調査を行った。

(2) 教員対象質問紙の調査結果

「各教科等で身に付けた資質・能力を活用する場として関連を十分に意識している」という設問に「当てはまる」と回答した教員は7.1%であった。また、「児童に意思決定したことを粘り強く実践させる」ことに難しさを感じていると回答した教員が66.0%であった(図1)。

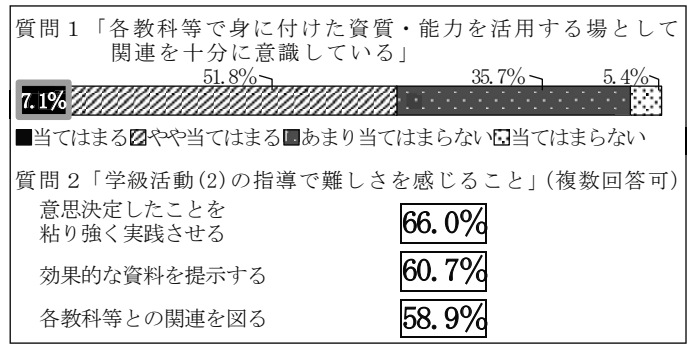


図1 教員対象質問紙の調査結果

(3) 児童対象質問紙の調査結果

質問1「学級活動の時間で、学習や生活の目標を決めるときに、授業で学んだことを生かして考えている」という設問に「当てはまる」と回答した児童は23.1%であった。また、質問2「学級活動の時間に決めた目標を達成している。」という設問に「当てはまる」と回答した児童は31.2%であった。

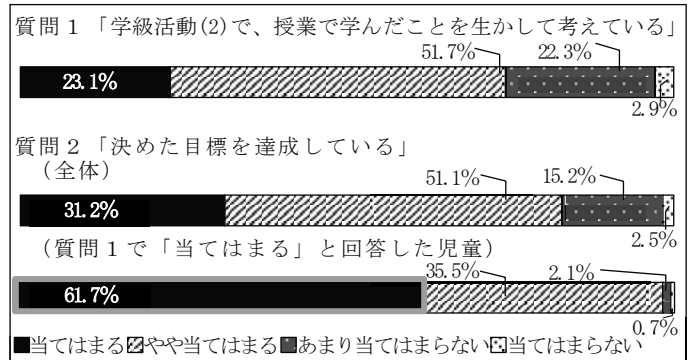


図2 児童対象質問紙の調査結果

そこで、質問1で「当てはまる」と回答した児童の質問2の回答を分析すると、「当てはまる」と回答した児童が61.7%であった(図2)。

(4) 上述の結果を基にした分析と考察

教員が指導の難しさを感じている「児童に意思決定したことを粘り強く実践させる」ことは、学習や生活の目標を意思決定させる際に「各教科等で身に付けた資質・能力を活用させること」と関連していた。そこで、本研究を通して、各教科等で身に付けた資質・能力を活用できるような具体的な手だてを講ずることによって、児童は意思決定したことを粘り強く実践し、自己の課題を解決できるようになると考えた。

3 開発研究

(1) 教科等横断的な視点で指導計画を組み立てるための手だて

ア 各教科等の指導計画及び身に付けさせる資質・能力に基づいた学級活動(2)の指導計画の立案

2の調査研究より、各教科等で身に付けた資質・能力を活用して自己の課題を解決させるためには、教員が各教科等の指導計画を基に教科等横断的な視点で学級活動(2)の指導計画を組み立てる必要があることが分かった。そこで、学級活動(2)で活用させたい資質・能力を把握し、テーマに沿って指導計画を組み立てることにした(図3)。

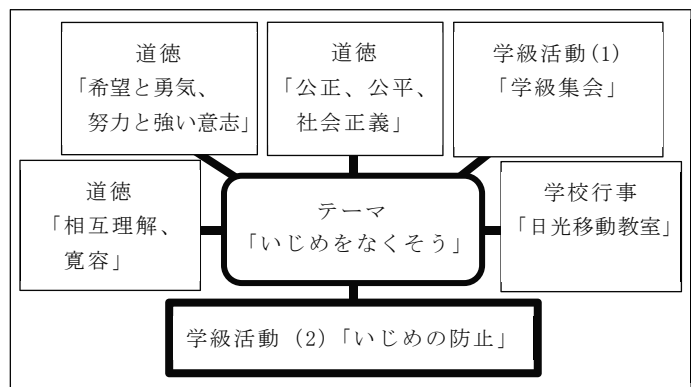


図3 いじめの未然防止をテーマに指導計画を組み立てた例

イ 意思決定したことを実践する場の設定

各教科等での学びを把握し、それを活用した学級活動(2)での意思決定を想定し、意思決定したことの実践の場(既存の学校行事等)につなげるという順で指導計画を組み立てることで、より指導の効果を高めることができると考えた(図4)。

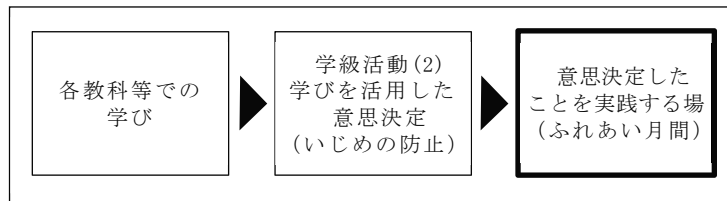


図4 いじめの未然防止をテーマに実践の場を設定した例

(2) 身に付けたことを整理して可視化させ、自己の課題を解決させるための手だて

各教科等で身に付けた資質・能力を整理して可視化できる「つながりノート」を児童一人一人に作成させる。テーマに関わる学びを「つながりノート」に記録させていく。学級活動(2)の時間では、まず、①「課題の把握(つかむ)場面」で本時の問題を押さえる。②「原因の追求(さぐる)場面」で、本時の問題が起こる原因を考えさせ、付箋紙に記入させる。そして、③「解決方法等の話し合い(見付ける)場面」で、「つながりノート」に記入された各教科等で身に付けた資質・能力を活用して、原因と解決方法を結び付けさせる。原因と結び付かない場合は、右下の空欄を活用して新たな解決方法を考えさせる。④「個人目標の意思決定(決める)場面」では、③で結び付けた解決方法から、自己の課題を解決するために最もよいと考えるものを意思決定させる。以上を自己の課題を解決させるための手だてにした(図5)。

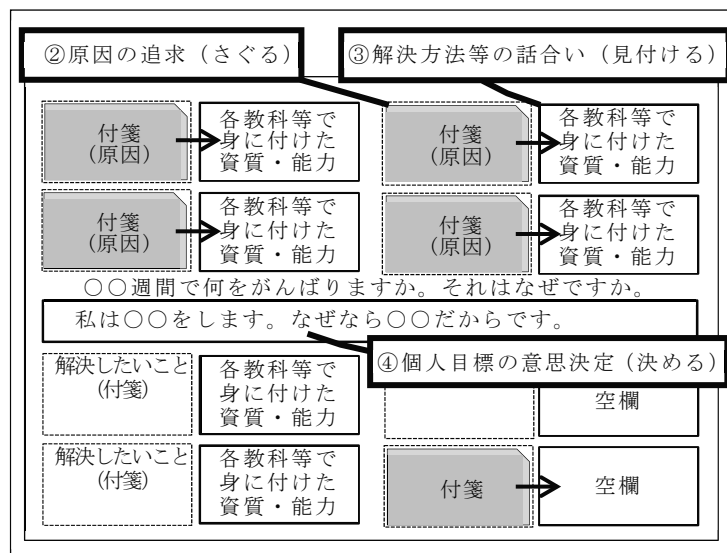


図5 「つながりノート」の使い方

4 検証授業及び検証授業の分析

(1) 検証授業の概要

所属校第5学年及び第6学年において、学級活動(2)の内容ア、イ、ウ、エからそれぞれ1点ずつ題材を設定し、授業を実施した(表1)。

表1 検証授業の概要

学年	内容	題材	ねらい
第6学年 1組・4組	ア 基本的な生活習慣の形成	「気持ちの込もったあいさつ」	日常生活を振り返り、最高学年として下級生の手本になり、気持ちの込もった挨拶をするための具体的な解決方法を考え、意思決定することができる
第6学年 2組・3組	イ よりよい人間関係の形成	「いじめの防止」	日常生活を振り返り、いじめをしない、させない、見過ごさない、見て見ぬふりをしないための具体的な解決方法を考え、意思決定することができる
第5学年 1組・4組	ウ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成	「インターネットの危険」	日常生活を振り返り、インターネットやSNSを介したトラブルや犯罪に巻き込まれないための具体的な解決方法を考え、意思決定することができる
第5学年 2組・3組	エ 食育の観点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成	「食事と健康」	日常生活を振り返り、よりよい食習慣を身に付けるための具体的な解決方法を考え、意思決定することができる

(2) 検証授業の分析

各教科等で身に付けた資質・能力を活用して自己の課題を解決することができたか検証するために、以下の方法で分析を行った。

ア 「つながりノート」の個人目標欄の記述からの分析

個人目標欄に、各教科等で身に付けた資質・能力を活用して、自らの解決方法を意思決定し、記述することができた児童の割合を求めた(表2)。

表2 各教科等で身に付けた資質・能力を活用して、「自らの解決方法を意思決定した」児童の割合と記述例
 (囲みは「つながりノート」を活用した割合。下線部は期待する児童の姿を見取ることができた箇所)

題材	「気持ちの込もったあいさつ」	「いじめの防止」	「インターネットの危険」	「食事と健康」
割合	96.8% (62/64人) 65.6% (42/64人)	98.3% (59/60人) 66.6% (40/60人)	98.6% (72/73人) 73.9% (54/73人)	96.9% (63/65人) 29.2% (19/65人)
記述(例)	表情や視線も意識して、気持ちの込もったあいさつをする。相手を気持ちよくすることができるからです。(国語科)	いじめを絶対にしません。周りの空気に流されないことは難しいけれど、勇気をもって自分の判断で行動します。(道徳科)	正しい情報を読み取れるようにしたいです。いろいろな情報を見ないで判断してしまうことが多かったからです。(総合的な学習の時間)	野菜をしっかりと食べて、給食を完食することを目指します。給食は五大栄養素がバランスよく含まれているからです。(家庭科)

イ 「つながりノート」を用いた一連の活動の振り返りからの分析

意思決定したことを実践した後に、「つながりノート」を用いた一連の活動の振り返りを実施し、児童の自己評価や記述を基に分析した(表3)。

表3 各教科等で身に付けた資質・能力を活用して、「自己の課題を解決した」児童の割合と記述例
 (囲みは「つながりノート」を活用した割合。下線部は期待する児童の姿を見取ることができた箇所)

題材	「気持ちの込もったあいさつ」	「いじめの防止」	「インターネットの危険」	「食事と健康」
割合	93.7% (60/64人) 64.1% (41/64人)	88.3% (53/60人) 68.3% (41/60人)	98.6% (72/73人) 71.2% (52/73人)	98.4% (64/65人) 27.6% (18/65人)
記述(例)	明るい表情で、相手の顔をしっかりと見てあいさつすることができた	自分の考えを大切にしてい、周りにつられないで行動することができた	正しい情報かどうかしっかりと調べてまとめることができた	栄養バランスを考えて食べることで、給食を完食することができた

ウ 検証授業実施前後の児童対象質問紙の調査結果からの分析(所属校の児童の変容)

「当てはまる」と回答した児童の割合が、質問1では11.5%から26.7%になり、15.2ポイント増加した。質問2では20.8%から27.8%になり、7.0ポイント増加した。「つながりノート」を活用して、身に付けた資質・能力を可視化し、意思決定及び実践の際に活用させた結果だと考えられる(図6)。

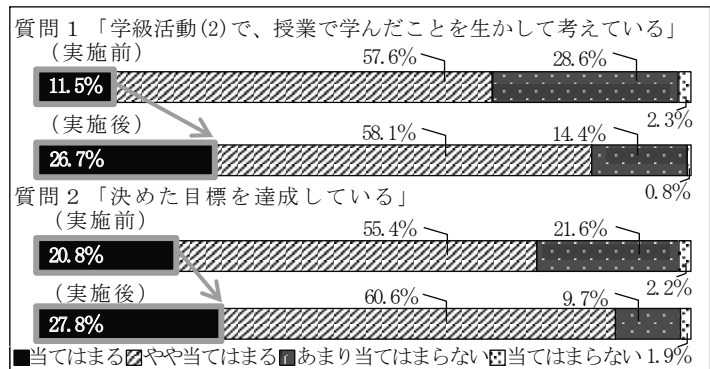


図6 検証授業前後の児童対象質問紙の調査結果(所属校)

第4 研究の成果

- 教科等横断的な視点で指導計画を組み立てたことで、学級活動(2)で意思決定する際に各教科等で身に付けた資質・能力を活用させることができた。
- 「つながりノート」に各教科等で身に付けた資質・能力を整理して可視化させることで、意思決定する際に活用させ、「自己の課題」を解決させることができた。

第5 今後の課題

- 実践後の「つながりノート」を各教科等で活用させ、児童の往還的な学びを実現する。
- レイアウト等を工夫・改善し、低・中学年や教科担任制においても有効な「つながりノート」を開発する。